

自立的な学習ができる児童が育つ算数指導

—発問の内面化に焦点を当てて—

教育実践高度化専攻 教科指導重点コース 理数・自然科学系（数学）

佐々木 裕之

算数・数学の学習過程で自立的に、時に協働的に行った時に児童の学習の質をより高いものにするためには、児童が自分自身や他者に問いかける内容が算数・数学的な見方・考え方を含んだものであることが重要である。教師が普段から意図的に算数・数学的な見方・考え方を含んだ発問をすることで、児童が自分自身や他者に問いかける内容を高めることができると考え本研究の目的を設定した。そのために、まず片桐（2017）の発問に関する研究、重松（1994）の内面化に関する研究を調べた。それらを基に場面ごとに分けられた発問の設定と振り返りシートの作成を行った。

研究の結果、繰り返し発問を使うことで、発問の内面化が促され、見方・考え方が養われた。その見方・考え方を使って課題を解決し、次の課題を自ら考え、取り組み、解決しようとする自立的な姿が見られた。これは、算数・数学の学習過程のイメージにおけるサイクルが動き出しているといえる行動である。また、振り返りシートからも発問回数が多ければ多いほど、児童に発問の内面化が促されるわけではなく、児童たちは、その状況に応じた発問を予想しやすいということがわかった。